

# 女性のエンパワーメント再考

## — グラミンバンクに関する先行研究とインタビューより —

頼 藤 瑠璃子

### はじめに

2006年にその創設者であるムハマド・ユヌスとともにノーベル平和賞を受賞したグラミンバンク（以下GB）は、マイクロファイナンス（以下MF）というユニークな融資方法や高い返済率、貧困削減実績などの点から注目を浴び続けてきた。GBのホームページによれば2009年10月時点の返済率は約98%で、これまで貧困から脱却したと発表するメンバーは累積で全体の約68%に上る<sup>1)</sup>。しかし、おそらくほとんどの「ジェンダーと開発」や「女性のエンパワーメント」に関心を持つ人々にとって刺激的であったのは、GBが主に女性を対象に貸付を行っているという事実だろう。同サイトに示されるように、現在約795万人のメンバーのうち女性の占める割合は約97%で<sup>2)</sup>、これは「貧しい農村の女性に貸す」というGB自身の方針が理由である。結果、貧困削減や所得向上だけでなく、女性のエンパワーメントに関する研究も広く行われるようになった。では、これらの研究ではどのような尺度が用いられ、そこにはどのような意識があるのだろうか。本稿では、GBがバングラデシュの農村女性に与えた影響に関する10の先行研究を筆者の調査データと比較し、女性のエンパワーメントのあるべき姿に関する考察を行う。

### 1 背景

久木田（1998）によれば、「エンパワーメント」という言葉は、17世紀には「権限委譲」という法律用語として使われていた。この言葉が「女性と開発」の中で初めて登場するのは、1985年ナイロビで行われた第3回世界女性会議で、1990年の第4回北京会議では持続可能な

---

1) Grameen Bank (2009a)

2) メンバー数は2009年11月時点のもの。Grameen Bank (2009b) より。女性メンバーの割合は、2009年10月時点のもので、Grameen Bank (2009a) より。

開発達成の欠かせない概念として位置付けられている。

Batliwala (1995) によると、女性のエンパワーメント概念は「フェミニズム」と「民衆教育」の二つの相互作用を背景としている。「エンパワーメント」概念はそもそも 1970 年代に始まった民衆教育から発生しているものの、その中にジェンダーの視点を取り入れる試みは後にフェミニスト民衆教育者によって行われた。従ってエンパワーメントは、生活の中で隅々にまで張り巡らされた他者との関係性の変容を促す一つ的手段であるとも言えよう。バングラデシュの農村で女性は立場の弱い存在であり、それ故、女性顧客に重点を置いた GB は、女性に力を与えるものとして、そして硬直した農村での力関係を変えるものとして、注目を浴びているのである。

しかしエンパワーメントを求めるとき、そこには研究者の「理想」がフィルターとなって、開発計画の「受け手」の人々の暮らしやエンパワーメント過程における反応を歪めて見てしまう恐れがある。特に開発の手段としてエンパワーメントを用いる場合、外部者はある程度の恣意性を持たざるを得ない。なぜなら「エンパワーメント」議論の主流は、エンパワーする側の語り (内山田, 1999, 2 頁)」であり、「このイデオロギーを最も必要としているのは、empowerment の対象となっている人々ではなく、彼らを empower しようとしている人々 (青木, 1999, 16 頁)」だからである。支援を行っている人々や国に、現在の「先進国」と同じような道を歩み、同じような思想を抱くように望むのであれば、「先進国」の理想を詰め込んだ「エンパワーメント」がなされるだろう<sup>3)</sup>。

## 2 GB 研究の始まりと変遷

最初に GB の女性に関する研究を行ったのは Latif (1994) で、クレジット参加者の避妊実行要因を GB や他 2 つのクレジット機関 (BRAC<sup>4)</sup>, BRDB-RD12<sup>5)</sup>) の間で比較している。2759 名の女性を対象とした調査データを用いたこの研究では、二変数分析と多変量回帰分析を用いている。Latif (1994) では避妊実行に関して、現在結婚している妊娠可能年齢 (15-49 歳) の

---

3) もちろん、先行研究者達の全てが先進国出身ということではできないが、それでも高等教育を受けるまでの経済的余裕を持つためには、彼らが比較的富裕層に属していることが必要である。したがって本稿では、研究者を「貧困の中で育っていない人々」と見なす。

4) Bangladesh Rural Advancement Committee (バングラデシュ農村向上委員会) の略で、アジア最大の NGO。マイクロクレジットだけでなく自らの大学やインフォーマル初等教育、保健衛生活動なども行っている。

5) Bangladesh Rural Development Board (バングラデシュ農村開発局) が 1988 年から 1996 年に行った政府主導のマイクロクレジット事業のこと。

## 女性のエンパワーメント再考

女性にとって、BRAC と GB への参加とこれまでの妊娠経験、夫と自分の教育レベルが正の影響を持ち、現在の年齢と土地所有が負の影響を与えていることを明らかにしている。また、これまでに妊娠経験のある女性にとっては、子供の生存状態が強い正の影響を与える一方、プログラム参加の影響がそれほど強いものではないことも示した。また、Latif (1994) は避妊実行促進の大きな要素の一つとして、避妊手段を村の近くで提供する政府の家族計画政策の存在を挙げている。

Schuler and Hashemi (1994) は、二段階クラスターデザインを用いて GB と BRAC メンバーを無作為抽出により選出し、さらに GB も BRAC も存在しない村から一世帯から一人成人女性を比較グループとした。また、その後の補足調査で二つ目の比較グループとして、GB のある村に住んではいないがメンバーでない女性を選び出している。二つの調査を合わせて対象となったのは GB・BRAC メンバー、GB のある村の非メンバー、MF 機関のない村の 50 歳未満既婚女性 1305 名で、プログラム参加の家族計画実行に対する影響を明らかにした。そこでは、「農村のクレジットプログラムは経済的役割の強化によって女性をエンパワーしている」、「エンパワーメントは避妊実行に正の影響を与えている」、「プログラムが提供されている村での居住やプログラム参加は女性の避妊実行傾向を増加させる」という三つの仮定を立て、それぞれロジスティック回帰分析を行っている。結果、GB や BRAC へ参加している女性や GB のある村の非メンバー女性はエンパワーメント状態にあるものの、避妊実行は GB メンバーと GB のある村の非メンバー女性にのみ限られることも明らかになった。一方で、エンパワーメント指標を加えた別の分析では、GB メンバーに対する GB 加盟の影響は見られなくなったが、GB のある村に住む非メンバー女性にはまだ影響が残っていた。ここから、直接的にはなく異なった形で GB は避妊実行に影響を与えていると考えられる。この結論に対し加盟年数ごとに区切って計算しなおすことで、いつ頃から GB の直接的な影響が失われエンパワーメントの効果が台頭するのか、明らかにすることができるのではないだろうか。

次に挙げる研究は Schuler and Hashemi (1995) で、避妊実行における MF の影響の測定を目的としている。前年と同様に GB のある村に住む非メンバーの女性、MF 機関のない村に住む女性 (50 歳未満既婚) 1305 名を対象とし、女性の役割や地位、リプロダクティブヘルス (以下リプロ) に関する規範の変化についてインタビューを行った。同時に、家族計画実行に大きな影響をもたらすと考えられている「家族計画普及員の訪問の経験」と「過去三ヶ月の家族計画普及員の訪問」についても検証が行われている。この研究では、GB への加盟とそのスピルオーバー効果、家族計画普及員訪問の経験が避妊実行に大きな影響を与えていることを明らかにした。

Hashemi, Schuler and Riley (1996) は、「女性の役割と地位」と「リプロに関する規範」の変化のプロセス解明を目的とした研究である。ここでは参与観察とインタビューを使用し、GB 2 村、BRAC 2 村、非 MF 機関 2 村の計 6 村に住む 50 歳未満の既婚女性 1300 人を対象とした。分析は GB メンバー、BRAC メンバー、GB のある村に住む女性、MF 機関の無い村に住む女性を比較している。その結果、設定されたエンパワーメント指標のうち、GB と BRAC のメンバーは「可動性」、「小・中規模買い物能力」、「家庭内の主な意思決定」、「経済的安全性」、「政治的法的意識」「公共キャンペーンと抵抗への参加」を増加させていることが明らかになった。

また、Schuler, Hashemi, Riley and Akhter (1996) は、女性に対する暴力と女性たちの社会的経済的従属状態の関係を探ることを目的とした研究である。これまでと同様 1300 名の女性を対象とし<sup>6)</sup>、文化人類学的調査と標本調査が行われた。文化人類学的調査では女性だけでなく夫にもインタビューし、さらに二つの村で情報提供者にも質問している。標本調査では、家庭内暴力を「過去 1 年間に夫から女性に対して行われた、殴るなどの行為」と定義し、ロジスティック回帰分析を行った。文化人類学的調査で明らかになったのは、女性や男性が自らの伝統的役割を果たせないとき、女性が病気になって働けないとき、ダウリーの額に不満があったりさらに要求したいとき、夫婦の間で意見の不一致があったときなどに家庭内暴力が行われるという結果である。バングラデシュの男性にとって暴力は正当な権利であり、女性を「正しい」方向に導くための手段であると考えられている上、個人としての「夫」だけでなく、警察という「男性」による暴行も多い。また、ファトワ (Fatwa) やシャリシュ (Shalish)<sup>7)</sup> も男性によって管理されているため、女性の社会進出を快く思わず、自らの支配力が減ると考える有力者や高利貸し・原理主義者によってファトワが発せられ、女性の屋外での活動や女兒への教育を諦めさせることも示された。ロジスティック回帰分析では、より年齢が高く、生存する男児数が多い女性ほど暴力を受けておらず、経済状況や宗教は女性への暴力に影響がなく、居住区やクレジットプログラムへの参加、プログラム村での居住は暴力を減少させることが明らかにされた。その中でも最もプログラムの影響が少ないのが MF 機関のない村に住む女性で、非メンバー、BRAC メンバー、GB メンバーの順に影響は大きくなっている。しかし、クレジット

---

6) Schuler, Hashemi, Riley and Akhter (1996) と Schuler, Hashemi, and Riley (1997) では、Schuler and Hashemi (1994) と同じサンプルを用いているが、その数は 1305 名から 1300 名に変更されている。

7) ファトワとはイスラム教の指導者から発せられるコーランの私的解釈のことで、シャリシュとは村内の有力者で構成される私的裁判機関のことを指す。

トプログラムの加盟期間や家計に対する女性の貢献は家庭内暴力に影響を与えておらず、クレジットプログラムのその他の側面が関連していることを示している。文化人類学的観察からは、女性が収入源となることで男性から尊重され、所得が高水準の世帯ではジェンダー規範にとらわれず自由に行動が可能になった女性の存在も指摘された。しかし、多くのメンバーがその所得レベルに達するまでには時間を要するだけでなく、少しずつエンパワーメントされ始めたり収入を得始めたりした女性たちのほうが、男性の言うなりか完全に貧しい女性たちよりも暴力を受ける傾向にあることも明らかにしている。女性が家庭外で他の女性たちと家庭内暴力に対して連携したり、世帯の中で確実に収入源になったとしても、男性やコミュニティの意識が変わらなければ、GB や NGO などでも女性への暴力に対し明確に否定の意思を表明することは難しい。家族計画の急速な普及に見られるように、政府としての法律作りやメディアによる意識啓発がなされなくてはならないと提言している。

家族計画に関する最後の研究は Schuler, Hashemi, and Riley (1997) で、クレジットプログラムと女性のエンパワーメントと避妊実行の関連を明らかにすることが目的とされている。そのため、GB・BRAC のメンバー、GB のある村に住むメンバーでない女性、MF 機関のない村の女性 (50 歳未満既婚) 1300 名を比較し、ロジスティック回帰分析を行った。用いられた独立変数は、エンパワーメントと対象者の背景を表す 21 の指標である。この研究では、女性の背景を表す指標の中で「生存する息子数」と「ヒンズー教徒であること」が避妊実行と強い相関関係を持ち、「教育の有無」、「ランジャヒ地区<sup>8)</sup>」、「クルナ地区<sup>9)</sup>」、「GB 村での居住」、「メンバー加盟期間」との間に弱い相関が見られた。また、エンパワーメント指標の中では「家計への貢献」、「可動性」、「支配からの自由」との間に強い相関が見られ、「政治的法的意識」がやや相関関係を持っていた。

しかし 98 年以降、これまで家族計画一辺倒だった研究からの分化が始まったように思われる。Haraguchi (2000) は、GB の女性が 92 年と 97 年の地方議会選挙において多数立候補し、そのおよそ 4 分の 1 が当選したことを明らかにした。GB 自体は特定の候補を擁立するなどの政治的行動は起こさないが、地方議会選挙における投票行動の促進を始め、メンバーの組織化においてもリーダーの選出と投票を積極的に行っている。ここから Haraguchi (2000) は、女性たちは GB 加盟により選挙という行為自体に慣れ、それがこの結果を導いたのではないかとしている。同研究ではこれから議会内の女性議員への差別をやめること、貧しい議員への補助

---

8) バングラデシュの西部に位置する地区。

9) バングラデシュの南西部に位置する地区。

金を出すこと、NGO が政治参加に関するワークショップを行うことが必要であると提言している。

翌年に発表された有川 (2001) では、MF の家庭内暴力に対する影響に関する先行研究が検証されている。そこでは、GB や BRAC では加盟による効果が家庭内暴力に対して抑止力となっておらず、PROSHIKA<sup>10)</sup> のように積極的に女性たちに家庭内暴力についての意識啓発と女性たち同士の連携構築が必要であること、さらに男性へのアプローチも必要であるとまとめている。

GB の住宅ローンによってもたらされる影響についての研究は、坪井 (2003) が行っている。この研究では、「住宅ローンを借りている女性」、「GB メンバー」、「非メンバー」各 30 名へのインタビュー結果が比較された。そこでは、住宅ローンのシステムが貸屋や貸間というビジネスを新たな収入源とすることで、女性を保護していることが明らかになった。さらに女性の意識の向上や子供の教育、女性間のネットワーク拡大などの社会的意義を GB はもたらしており、社会的変化を捉えるために多角的なアプローチが必要であると述べている。

坪井 (2006) では、グループ基金を経験した女性メンバーたちの貯蓄と消費に対する意識と行動を明らかにし、女性たちが受けた影響を考察している。まず GB の 1983 年から 2000 年の年次報告書を用いて、グループ基金を女性は生活の質向上<sup>11)</sup> に、男性は所得向上<sup>12)</sup> に多く使用しているという事実を明らかにした。次に GB メンバー 160 名を、GB 独自の脱貧困基準によって分類された貧しい村と豊かな村、その中でグループ基金から融資を受けたことがある女性、受けたことのない女性の 4 段階に分類した。その結果、「グループ基金から融資を受けた人は貧しい地域に多い」こと、「グループ基金から投資される生活向上のための資金比率は貧しい人ほど高く、豊かな人ほど低い」こと、「GB 加盟によって貯蓄の重要性を認識し、その傾向は貧しい地域に住むグループ基金から融資を受けた女性に顕著である」ことがわかった。また、グラミンバンクメンバーは 4 人に一人が家庭内で相対的に強い意思決定権を持っていることも示した。

以上から分かるように、1990 年代には家族計画やリプロダクティブヘルス、いわば女性を「子どもを産み育てる存在」として見なし、その機能を持つ女性への変化に注目が集まっている。保守的な農村において「家族計画」という触れにくい問題に真っ先に焦点が当たったのは、女性のエンパワーメントが家族計画と切り離せないものであることと、人口問題への高い関心

---

10) バングラデシュの NGO の一つで、マイクロクレジットを農村女性たちに提供している。

11) 保健医療や世帯での入用などを指す。

12) 事業投資やローン返済などのこと。

## 女性のエンパワーメント再考

を表していると考えられる事ができるだろう。しかしGBの研究が広まるにつれ、女性の生活をより包括的に捉えた研究がなされ始めている。そもそもエンパワーメントが「力関係の変容」を志向する概念であるならば、女性の持つ特別な「出産機能」だけでなく日々の生活の全てに渡って焦点が当てられるべきことは言うまでもない。そしてそこに外部者の考える「女性の姿」が現れるのである。

### 3 先行研究が測ろうとしているもの

では、外部者である研究者はどのような「理想像」を描いているのだろうか。まず、エンパワーメントの構成要素である「力(power)」について考えてみたい。Conger and Kanungo (1988) は、このエンパワーメントを他者との関係の中で作用するものと個人の内部から発生するもの二つに分類した。安梅(2004)はこれを「関係」と「動機付け」と呼んでいる。前者において力とは「組織的な資源への正式なコントロール、または権限の所有<sup>13)</sup>」であり、後者では「個人の動機付けとなる性質に根ざしたもの<sup>14)</sup>」と考えることができる。

表1 用いる項目

著者	用いる項目	分析法
Latif (1994)	現在の避妊の割合	単回帰と重回帰
Schuler and Hashemi (1994)	現在の避妊実行の有無、自己意識と将来の展望、可動性、経済的安全性、小規模買い物・中規模買い物、主な意思決定への参加、家庭での意思決定への参加、政治的法的意識、公共の政治や抵抗キャンペーンへの参加	ロジット回帰
Schuler and Hashemi (1995)	現在の避妊実行の有無、可動性	二変数間の比較とロジット回帰分析
Hashemi, Schuler, and Riley (1996)	可動性、経済的安全性、小規模買物の能力、中規模買物の能力、主な意思決定への参加、支配からの比較的自由、政治的法的意識、公共の政治や抵抗キャンペーンへの参加	ロジスティック回帰分析
Schuler, Hashemi, Riley and Akhter (1996)	暴力への従属、家族の生活への貢献	ロジスティック回帰分析
Schuler, Hashemi, and Riley (1997)	現在の避妊実行、可動性、小規模買物の能力、中規模買物の能力、主な意思決定への参加、支配からの比較的自由、政治的法的意識、政治的行動や公共活動への参加、経済的安全性と家族の生活への貢献	ロジスティック回帰分析
Haraguchi Yoshio (2000)	政治参加状況	統計的手法
有川志野 (2001)	家庭内暴力の有無	先行研究検証
坪井ひろみ (2003)	持ち家の影響	統計的手法
坪井ひろみ (2006)	買い物実行の主体、買い物における意思決定	統計的手法

(出所) 筆者により作成

13) Conger and Kanungo. 1988. p473

14) 同上。

本稿では、まずこれまでグラミンバンクの女性に対する影響を検証したもののうちの、著者の設定した主題や用いた測定項目について考察する。先行研究者たちが女性を測ろうとしているその項目は、そのまま先行研究者たちの関心を表す。それは、研究者たちの頭の中に、それが望ましいものとして存在しているからである。表1はそれら項目のうち、「関係」と「動機付け」の二つに分類できるものを示した。

表2 「関係」と「動機付け」

	数	項 目
関 係	30	現在の避妊実行の割合・有無，可動性，経済的安全性，小規模・中規模買い物能力・主要な意思決定への参加，家庭内での意思決定への参加，公共の政治や抵抗キャンペーンへの参加，暴力への従属，支配からの比較的自由，政治参加状況，家庭内暴力の有無，持ち家の影響，買い物実行の主体，買い物における意思決定
動機付け	6	自己意識と将来の展望，政治的法的意識，家族の生活への貢献

(出所) 筆者により作成

さらに、これらの「力」が安梅(2004)の「関係」と「動機付け」のどちらにあたるかを示したものが表2である。先行研究の中では、圧倒的に「関係」としての力が重要視されていることがわかる。すなわち、バングラデシュにおける女性のエンパワーメントとは、他者との関わりの中でそれを変容させていくために発揮されるものであると言えるだろう。

本稿では、これら項目の分析手段として表3に示す目黒(1995)の設定した5つのエンパワーメント尺度を用いた。これはタイ・ネパールでの調査結果を元に、国際的なエンパワーメント測定のため考え出されたものである。

表3 エンパワーメント尺度

尺度1	所 得	家族の所得および本人の所得増加
尺度2	人 的 資 本	知識スキルの活用，知識スキルの会得，読み書き計算能力の向上，簿記スキルの会得，組織運営への積極参加
尺度3	人的ネットワーク	知り合いが増えた，参加する会合が増えた，忙しくなった
尺度4	威 信	信頼・尊敬を村人から得た，信頼・尊敬を家族から得た
尺度5	新 た な 制 度	ローンへのアクセス

(出所) 目黒(1995) 82頁より抜粋

まずこれらのエンパワーメント尺度に、表1に示す先行研究から抽出された項目を研究者の意識として、当てはまるところに分類する。表4はその結果を示したものである。

この表からは、特に「尺度4：威信」に重点をおいた、すなわちエンパワーメントの理想像



女性のエンパワーメント再考

表 4 研究者の意識

	研究者の意識	具体的な項目
尺度 1	3	経済的安全性, 持ち家の影響
尺度 2	13	現在の避妊の割合や有無, 政治的法的意識
尺度 3	4	抗議活動や政治的行動への参加, 政治参加
尺度 4	20	中規模買い物の能力, 小規模買い物の能力, 買い物における意思決定, 可動性, 支配からの比較的自由, 家庭内暴力, 暴力への従属, 意思決定への参加, 主要な意思決定, 家庭内での意思決定
尺度 5	0	

(出所) 筆者により作成

として家族や村人から信頼や尊敬を得た状態を描いていることがわかる。以下に、この尺度に含まれる項目について説明する。「中規模買い物の能力」とは、女性が自らの衣服やより大きな生活必需品を自分の判断や自ら稼いだお金によって行っているかどうかを示すものであり、「小規模買い物の能力」とは、家族や自分のための日用品、子どもへのお菓子などの買い物を自らの判断や自ら稼いだお金によって行っているかどうかを示す。これらは Schuler and Hashemi (1994) 等で使用され、特に坪井 (2006) は「... (前略) とりわけ貧困女性がひとりて日常の買い物に行く、あるいは女性にとって最も高価で貴重なサリーを自分の意思で買うという行動は、女性にそうすることが「任されている」ことであり、従って、家庭内における意思決定参加に強い関わりを持っていると考えられるのではないだろうか。」(7頁)と、「買い物における意思決定」の重要性を述べている。「可動性」は、Schuler and Hashemi (1994) 等において、市場・医療施設・映画館・村の外にそれぞれ行ったことがあるかどうかを示す。家庭内で過ごすことをよしとするイスラム教の規範によって、家族や親族の元を訪れる以外に家を出ることはまれであり、日々の買い物や娯楽のための外出は困難であった。Hashemi et al. (1996) 等で使用されている「支配からの比較的自由」とは、家庭内において女性の意に反して女性のお金や資産が使用されたり、里帰りを阻害されたりしていないかどうかを指している。また、有川 (2001) 等で用いられた「家庭内暴力」や Schuler et al. (1996) の「暴力への従属」に関しては、女性にとって、家庭で暴力をふるわれる恐れのない状態が理想的であることに疑問はないだろう。Schuler and Hashemi (1994) 等で使用されている「意思決定への参加」は家の改築や改装、ビジネスに関する決定に対し関わったかどうかや家庭内での意思決定における女性の地位や力を表している。この指標も家族計画に関する研究でエンパワーメント指標として用いられ、より女性が家庭内で力を持つほど家族計画が行われると考えられていることが分かる。「家族の生活への貢献」とは、女性の収入が世帯の支出の中でどれくらい貢献しているかという女性の実感に基づいた項目であり、Schuler and Hashemi (1994) でエンパ

ワーメント指標として用いられている。また、同(1994)の中の「主要な意思決定」は、明確な定義はされていないものの、同研究内に「家庭内での意思決定」という項目があることから、家庭外での意思決定の事を指すと考えられる。

次が、「尺度2：人的資本」である。Latif(1994)等で設定された家族計画に関する項目は、言うまでもなく人口問題や女性の人権を土台とした「家族計画」への関心とGBへの期待の現れであろう。実際に、同じくMFを行っている他の機関に比べてGBメンバーの避妊実行率は高く(Shuler and Hashemi. 1995)、その他の要素からの影響の可能性も削除できないとしながらも、GBメンバーに起こるエンパワーメントが避妊実行を促進していることが想像される。さらに、Schuler and Hashemi(1994)等で用いられた「政治的法的意識」とは、地方や中央の政治家の名前を知っているか、婚姻届の重要性や相続権について知っているかを示す。

その次が、「尺度3：人的ネットワーク」である。この尺度に当てはまるのは、Schuler and Hashemi(1994)等で用いられた「抗議活動や政治的行動への参加」である。前者は女性が家族以外の誰かと抗議活動などを行ったことがあるかどうかが表示されている。後者は、自営業も含め労働市場において供給される男女の労働時間を指している。この項目は「尺度2：人的資本」にも当てはめることができるが、ここでは「時間」に焦点を置いていることから「尺度3：人的ネットワーク」に対応するものとして考える。

その次に「尺度1：所得」が続く。これらの項目は純粋な所得の増加を表すものではないが、それに関連するものとしてここに分類する。最後に「尺度5：新たな制度」に該当する項目は、一つもない。

研究者一人一人の持つ問題意識を理想像の表れであるとし、その数だけでまとめて論じるとは、同一研究者による論文が半数近くを占める中、非常に乱暴のように思われる。しかし、それを許して「外部者の理想像」を描くならば、家庭やコミュニティの中で自ら意見を持ち、表明し、実行し、そのための資源も持つ女性の姿を浮かび上がらせることができる。またその女性たちは、自らの権利や地域の政治に関心を持ち、問題意識から社会的な行動を取ることのできる、「外」に向ける目をもった人々である。しかし、これはあくまで「外部者」の望む女性像でしかない。では、当事者である女性たちはどのような意識を持っているのだろうか。

#### 4 調査結果の分析と考察

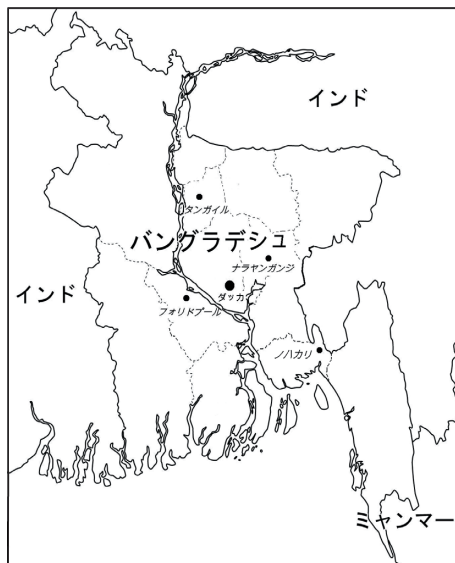
ここで用いるデータは、筆者が2005年9月の1ヶ月間GBのインターンに参加した際行った調査で収集したものである。筆者はインターン期間中農村の支店に滞在し、午前中はセンター

## 女性のエンパワーメント再考

ミーティングに訪れた女性メンバーを対象に、また午後は支店を訪れる女性メンバーを対象に、通訳を交えたアンケート調査を行った。調査開始時に目標標本数は特に定めなかったが、限られた期間内で可能な限り多く取ることを目指した結果、100名<sup>15)</sup>の女性にインタビューが可能となった。

調査地はまずパイロット調査としてダッカ近郊の「ガジプール県」に赴き、その後「タンガイル県」、「フェニ県」、「ノルシンディ県」、「フォリドプール県」に滞在した。「 Bangladesh の東西南北に位置し、産業の違いがわかりやすく、かつ首都ダッカからの距離も様々である地域」での調査を希望し、GB から提示されたのがこの4県であったためである。しかしダッカからの距離については、移動時間の削減とインターン受け入れ可能な支店の有無との関係から、首都から遠く離れた土地での調査は実行できなかった。また、午前中の調査は自らインタビューに答えてくれるメンバーや、推薦されたメンバーからインタビューを始め、その後、その女性等に次のメンバーを紹介してもらっていた。従ってどうしても地域的な、または人間関係に一定の偏りがあることは否定できない。しかし、午後の調査は支店を訪れるメンバー全員を対象とし、全インタビューにおけるその割合は52%であったため、ある程度の無作為性は保たれたと考える。

図1 調査地



(出所) <http://www.freemap.jp/>とGB (2006)より筆者作成

15) うち、後述するパイロット調査3名を含む。

また、表5はゾーン名と各ゾーンのダッカから見た方角、抱える支店数と各支店のメンバー数、さらにその下には筆者が実際に訪れた支店に所属するセンター数とメンバー数、インタビューを行ったメンバーの数、各支店での主要なローンの用途とその割合が示されている。この表からは、主要産業とメンバーの行っている経済活動がある程度一致していることがわかる。商業の盛んなノハカリ県では用途の20%が食料品店経営のために<sup>16)</sup>、近年縫製工場の建設が著しいナラヤングンジでは80%が縫製(特に糸紡ぎ)に、農業中心で交通の不便なフォリドプールではパン引き<sup>17)</sup>や土地貸しに使われている。しかし、留意しておきたいのは、一部の地域を除き、幹線道路や中心地から一步踏み入れればそこは農村で、人々のほとんどが農業に従事しながら日々の生活を営んでいることである。ポストBRICsとしてN-11<sup>18)</sup>の一つに数えられるバングラデシュであるが、未だ多くの人が農村に住み、まさにそこがGrameen(ベンガル語で「村の」)バンクの活動地なのである。また、各支店の3000人以上というメンバー数に比べ、筆者のインタビュー数はわずかではあるが、一部の傾向をつかむことはできると考える。

表5 地域ごとの概況

ゾ ー ン 名	ガジプール	タンガイル	ノハカリ	ナラヤングンジ	フォリドプール
産 業		工業	商業	工業	農業
位 置	北	北西	南東	北東	南西
支 店 数(軒)	80	86	89	87	85
支店毎の平均メンバー数(名)	3,961	3,272	2,930	3,823	3,177
支 店 名	カリヤプール	ドゥバイデル ドゥアイル	ムンシハット ボシュラン	シェケツチャール	ボホルプール バリアカンディ
センター数(件)		69	69	82	57
メンバー数(名)		3,565	3,215	4,279	3,185
インタビュー数(名)	3	12	29	28	25
ローンの主な用途		耕作(25%)、 藤細工(17%)	耕作(60%)、 食料品店(20%)	縫製(80%)	パン引き(20%)、 土地貸し(15%)

(出所) Grameen Bank (2005) と支店マネージャーからの聞き取りにより作成

(注) ガジプールのデータは手に入らなかったためここには示さない。

16) バングラデシュでは食事の後や午後にお茶を飲む習慣があり、農村でもお菓子や果物、お茶などを売る小さな商店が街道沿いに頻繁に見られ、村人で賑わっている。

17) 大型の人力車で人や荷物を運ぶ仕事。

18) 2007年にゴールドマンサックスが発表した、BRICsに匹敵する経済成長を遂げると予想される国々。バングラデシュ、エジプト、インドネシア、イラン、韓国、メキシコ、ナイジェリア、パキスタン、フィリピン、トルコ、ベトナムが含まれる。

女性のエンパワーメント再考

表6はインタビューを行った女性について表したもので、年齢では30代と40代に、加盟期間では10年以上15年未満に、教育レベルでは未就学から初等教育に偏りがある。しかし、GBが正式に発足して26年、既に一つの支店で担えるメンバーの数は限界を迎えており、誰かの退会を待つ「メンバー予備軍」が発生している。これから女性が新規に加盟する機会は非常に限られており、結果、年齢も加盟期間も偏ったと考えられる。

表6 女性たちの属性

年 齢		加 盟 期 間		教 育 レ ベ ル	
10代	1名	5年未満	13名	未就学	38名
20代	10名	6年以上10年未満	9名	初等教育(5学年まで・義務教育)	31名
30代	37名	10年以上15年未満	39名	中等教育(12学年まで)	24名
40代	34名	15年以上20年未満	23名	学士	1名
50代	10名	20年以上	9名	修士	1名

(出所) 筆者により作成

以下では、インタビュー項目のうち「夢や目標は何か」、「GB登場による村の女性の変化」の二つを使用する。本研究において「GB登場による村の女性の変化」を用いたのは、それが女性の視点を間接的に表していると考えられるためである。例えば「意思決定を行うようになった」という回答があったとして、それはその回答を行った女性の中に「意思決定を行うかどうか」という問題意識がなければ導かれない。この「女性の変化」に関しては84名分の回答しか集めることができなかつたため、これら二つは統合せず別々に分析する。表7は「女性の夢や目標」で、表8は「女性の意識」で行われた回答を分類した<sup>19)</sup>。

表7からわかるのは、女性たちの回答全てが所得向上に集中している点である。また、20

表7 女性の夢や目標

	女性の夢や目標	具体的な項目
尺度1	71	収入向上・新規のビジネス
尺度2	0	
尺度3	0	
尺度4	0	
尺度5	0	

(出所) 筆者により作成

19) それぞれ複数回答を含む。

名ほどが「生活を発展させる (develop life)」と答え、重ねて具体的な事柄について尋ねたところ回答がなかったため、女性たちは所得向上に加え、包括的な生活改善に関心を持っていることが考えられる。

表 8 は、「GB が村に登場したことで女性に起こった変化」すなわち女性の意識に対する回答をまとめ、分類したものである。

表 8 女性の意識

	女性の意識	具 体 的 な 項 目
尺度 1	12	お金を稼いでいる
尺度 2	64	投資をする・生活環境や家庭計画の意識を持つ・仕事をする・賢い・何かたくさんのことをしている・手工芸品
尺度 3	80	活動的・協力的・GB に参加している
尺度 4	45	意思決定をする・夫をコントロールする・お金を使う・お金を扱う
尺度 5	0	

(出所) 筆者により作成

最も多かったのは 80 名が答えた「尺度 3：人的ネットワーク」で「活動的」、「協力的」、「GB に参加している」などの回答が見られた。この中でも特に「活動的」と答えた女性が多く、GB が村に入り込むことによって女性がただ家庭の中に閉じこもった状態から、外へと出て行くようになった様子が伺える。

次に続くのが 64 名の「尺度 2：人的資本」で、ここに該当する回答として「投資をする」、「生活環境や家族計画の意識を持つ」、「仕事を持つ」、「賢い」、「何かたくさんのことをしている」、「手工芸品を作る」などが見られた。

また、「尺度 4：威信」を答えた人数は 45 名と少なくない。中でも「お金を扱う」という回答が多く、家庭の中で収入源となるだけでなく、実際にそれを使用するだけの権限を家庭内で持っていることがわかる。さらに、筆者のインタビューの中で、女性たちに「GB 加盟後の家族や周囲との関係の変化」を聞いた際、ほとんどの女性が家族や親族、周囲が女性に協力的かつ友好的になり、尊敬するようになったと答えている。従って、女性たちがメンバーになることによって「尺度 4：威信」を獲得することができたと言えるだろう。「尺度 1：所得向上」に対応するのは「お金を稼いでいる」で 12 名の女性が回答した。最後に、「尺度 5：新たな制度」に合致する回答を行った女性はいなかった。

全体的に見ると、「夢や目標」で多かった「尺度 1：所得向上」はあまり多くなく、「尺度 3：人的ネットワーク」、「尺度 2：人的資本」、「尺度 4：威信」により多い焦点が当てられている。

## 女性のエンパワーメント再考

そもそも GB 自身は、自らの生活を改善させるための術を知っているがその機会を手に入れることができている人々、として貧困層を見ている。融資システム自体がグループを作るところから始まり、また毎週一回のセンターミーティングで他の女性たちと接することから、この二つは GB の戦略を忠実に表した結果であると、言うことができるだろう。

またこの表は、エンパワーメントのプロセス明確化のためのヒントを与えているかもしれない。なぜなら、前述したように「尺度 2」と「尺度 3」の充足は GB の戦略であり、これらを多くの女性が答えることは不思議なことではない。また、この質問では個人の心理的变化に関する解答も多く<sup>20)</sup>、Batliwara (1995) はエンパワーメントに際して心理的变化が真っ先に起こると述べている。そもそも GB の融資という枠組みの中で主体は自らであり、その変化の発露が先に自分自身に起こるのは極めて自然なことである。その変化しつつある自らを以って所得を向上させ、周囲の無理解を理解と尊敬に変えていく、GB の女性たちが辿ったエンパワーメントの経路がここに現されている。

表 9 はこれまでに明らかになった「研究者の意識」、「女性の夢や目標」、「女性の間接的意識」を改めてまとめて示したものである。研究数とインタビュー数には大きな差があるため、単純に数だけを比較することは適切ではないが、尺度ごとに分析を行いたい。

表 9 各項目のまとめ

	研究者の意識	女性の夢や目標	女性の間接的意識
尺度 1	3	71	12
尺度 2	13	0	64
尺度 3	4	0	80
尺度 4	20	0	45
尺度 5	0	0	0

(出所) 筆者により作成

まず「尺度 1: 所得」に関して女性は「夢や目標」で重点を置き、研究者の意識では 3 つの項目が用いられているだけである。前述したように、女性は「所得」獲得に非常に強い関心を抱いている。それは、女性たちの GB 加盟の理由が貧困からの脱却にあるからで他ならない。エンパワーメントの結果として「所得上昇」があるのだろうか、それとも「所得上昇」の結果「エンパワーメント」があるのだろうか。それらは共に補完しあう関係かもしれない。しかしおそらくほとんどの女性たちが、GB から融資を受ける際、「エンパワーメント」を目的にし

---

20) 勇敢になった、自信がついた、等の回答が見られた。

ていたわけではないだろう。女性の関心は何より生活改善にある。

次に「尺度2：人的資本」と「尺度3：人的ネットワーク」であるが、「女性の意識」の中で回答数が最も高く、また「研究者の意識」の中でも比較的多いが、「女性の夢や目標」の中では触れられていない。このことから、女性の直接的な関心に対しては研究者の意識との間にはズレはあるものの、女性の意識とはある程度近い関係を築いているということができよう。

「尺度4：威信」に関しては、特に「研究者の意識」と「女性の夢や目標」の間に大きな乖離がある。メンバー女性が村で暮らしていく中で、家族や村人から受け入れられることが理想的であることは言うまでもないが、それがエンパワーメントの究極の理想像なのだろうか。少なくとも女性たちの回答を見る限り、それが直接の目標ではない。女性たちが家族や周囲から受け入れられ、尊敬されているという実感はあるものの、それが女性たちの欲するものであるかどうかは再考する必要がある。

「尺度5：新たなローン制度」に関しては、女性たちの意識には現れてこなかった。筆者の調査でも、GB以外のMF提供機関に参加している女性はほとんどおらず、大半の女性が「必要ない」と考えていた。研究者たちもエンパワーメントの結果として「複数の機関に加盟する」状態を描いていないように思われる。さらにこれは、GBが女性たちにとって十分な額のローンを提供していることの現われかもしれない。

以上のように、女性たちと研究者たちの意識はある項目では合致が見られ、ある項目では乖離が生じている。女性たちが最も求めるものが、研究者のなかではあまり重要視されていない、このことは研究者の求めるエンパワーメントと女性たちの求めるものとの乖離を如実に表している。このような大きな齟齬の下、エンパワーメント指標を設定して測定、評価を行ったとして、それは本当に女性たちの「エンパワーメント」を表しているといえるのだろうか。女性たちのエンパワーメントを謳いながら、外部者である研究者たちは自らの歩んだ過程を絶対のものとして盲目的に信奉し、背景の異なる状況にそれを押し付けようとしていないだろうか。

## おわりに

本稿では、研究者と当事者である女性との意識のズレをつかむことを目的とした。我々外部者の抱く「理想像」はいくつかの面において女性の関心の領域から大きく離れ、また、ある部分においては重なりを見ることが出来る。GBの女性たちは日々の生活の中で確実に変化し、周りを変化させている一方で、より社会的かつ外の世界には強い関心を抱いていない。外部の



人間がいかにその重要性を語ろうとも、女性にはまず「生活」があり、自らの担う家庭での役割がある。それが、女性たちにとって何よりも優先されなくてはならない「関心事」なのである。最も女性が必要とし重点を置いている項目を含めず、一方的ともとれる「理想像」によって女性のエンパワーメントを語り、評価することに筆者は疑問を呈したい。

このような乖離の原因の一つは、「エンパワーメントを語る者」と「真にエンパワーメントを必要としている者」の不一致である。そもそもエンパワーメントとは、当事者が必要な力を得て行っていくものである。人間にとって、ここで挙げられた「理想像」が備わった状態が望ましいものであることは、筆者も否定しない。しかし研究者の大半は、例え発展途上国出身であれ、女性たちのように農村に住み、厳しい社会規範の下貧困から脱却しようと生活してきたわけではないだろう。本当にエンパワーメントを必要としている人々は、声を上げることができない。そして、研究者達にできることは、その代弁なのである。

また、このような乖離の発生は自然なことともいえる。研究者はプロセスの様々な段階にいる女性たちを、エンパワーメントの結果身につけているであろう力で測ろうとしており、最終段階から見た到達度のみが評価の全てである。それは、恐らくエンパワーメントのプロセスが未だ不明確である事に因る。

従って「女性のエンパワーメント」を手段とし目的とする全ての計画に対し、参加者の意識の確認が行われるべきである。どのような手法で、どのエンパワーメント段階にある女性たちが、どのような文脈に沿って、どのような関心を抱き、変化しているのか、細かく検証することで、女性たちが辿るエンパワーメントの道筋と終着点を普遍化することができるかもしれない。

目黒 (1995) の示すとおり、エンパワーメントは女性やその世帯周辺だけの社会的変化を指すだけでなく、経済的な意味合いも含んでいる。近年、活発化している BOP (Base of the Pyramid) と呼ばれる貧困層を対象にした市場活動は、グラミンバンクが始まりといっても過言ではない。これまで表に出ることのなかった女性たちを少額融資によってエンパワーするということは、地域の中での女性たちの経済主体としての活動を可能にする。それによって、地域自体の経済も活性化されるだろう。バングラデシュという国全体としての経済成長に加え、人口の土台 (Base) である「村の (Grameen)」女性の手によっても地域の発展を図ることも可能なのである。

本稿で用いた先行研究はあくまで筆者にとって入手可能なものであり、さらに同一研究者の手によるものが多数ある。従って、本稿自身が偏りを持ったものであるという批判を避けることは出来ない。また、本稿では全ての項目を同じ重さを持ったものとして扱っている。そのた

め、主題として用いられているものとそうでないもので、ウエイトを付けるなどの工夫がされるべきであったと思われる。最後に、先行研究と筆者の調査とでは、調査期間・時期、インタビュー対象者数、そもそもの目的も大きく異なっている。しかし、これらの乖離を覚悟してでも、研究者の意識と当事者である女性達の意識の乖離は明らかにされるべきであり、今後検証される必要があると考えた。さらに多くの事例についてこの齟齬が発見され分析されることで、「エンパワーメント」が真にそれを必要とする人々のための「開発手段」となるヒントを提供してくれるだろう。

研究者は自らの目的の下学問を発展させ、人々の生活を改善するために研究を行っている。それは、学問の究極的目標が、人々の豊かで幸福な生活にあるからに他ならない。発展途上国・先進国全ての人々の目標を充足させるような研究が、これからも必要とされている。

#### 参 考 文 献

- 青木恵理子, 1999, 「エンパワーメント empowerment に関する文化人類学的考察」, 内山田康編, 『ジェンダー：エンパワーメントを考える』, 国際開発高等教育機構国際開発研究センター, 10-28 頁。
- 有川志野, 2001, 「マイクロクレジットが女性に対する暴力に与える影響についての考察 バングラデシュ農村の経験から」, 『アジア女性研究』 第 10 号, 1-5 頁。
- 安梅勅江, 2004, 「エンパワメントとは」, 『エンパワメントのケア科学 当事者主体チームワーク・ケアの技法』, 医歯薬出版株式会社, 2-7 頁。
- 内山田康, 1999, 「ジェンダーとエンパワーメントを考える」, 内山田康編, 『ジェンダー：エンパワーメントを考える』, 国際開発高等教育機構国際開発研究センター, 1-9 頁。
- 久木田純, 1998, 「エンパワーメントとは何か」, 久木田純・渡部文夫編, 『現代のエスプリ エンパワーメント』, 至文堂, 10-34 頁。
- 坪井ひろみ, 2003, 「グラミン銀行の住宅ローンとバングラデシュの女性」, 『国際協力研究』 第 18 巻, 第 2 号, 20-29 頁。
- 坪井ひろみ, 2006, 「貧困女性の貯蓄・消費行動とジェンダー」, 『アジア女性研究』, 第 15 号, 1-10 頁。
- 目黒依子, 1995, 「開発プロジェクトと女性のエンパワーメント 分析モデルの実証的検討」, 国立婦人教育会館, 『女性のエンパワーメントと開発』, 国立婦人教育会館, 77-90 頁。
- 頼藤瑠璃子, 2005, フィールドノート。
- Conger, A J. and Kanungo, N R. 1988. "The empowerment Process: Integrating Theory and Practice." *Academy of Management Review*. Vol. 13 No. 3. pp. 471-482.
- Haraguchi, Yoshio. 2000. "Poor women's participation in the Local politics: case of the Grameen Bank members in Bangladesh." *国際開発研究フォーラム*, 第 15 巻, 27-48 頁。
- Hashemi, S M. Schuler, S R. and Riley, A P. 1996. "Rural credit program and women's empowerment in Bangladesh." *World Development*. Vol. 24. No. 4. pp. 635-654.

## 女性のエンパワーメント再考

- Latif, M A, 1994. "Programme impact on current contraception in Bangladesh." *The Bangladesh Development Studies. j* Vol. 31. No. 1. pp. 27-61.
- Pitt, M and Khandker, S. 1998. "The impact of group-based credit programs on poor households in Bangladesh." *Journal of Political Economy*. Vol. 106. No.5. 1998. pp. 958-996.
- Schuler, S R. and Hashemi, S M. 1994. "Credit Programs, Women's Empowerment, and Contraceptive Use in Rural Bangladesh" *Studies in family planning*. Vol. 25. o.2. pp. 65-76.
- Schuler, S R. and Hashemi, S M. 1995. "Family planning outreach and credit programs in rural Bangladesh" *Human Organization*. Vol. 54. No. 4. pp. 455-461.
- Schuler, S R. Hashemi, S M. Riley, A P. 1997. "The influence of Women's Changing Roles and Status in Bangladesh's Fertility Transition: Evidence from a Study of Credit Programs and Contraceptive Use." *World Development*. Vol. 25. No.4. pp. 563-575.
- Schuler, S R. Hashemi, S M. Riley, A P. Akhter, S. 1996. "Credit programs, patriarchy and men's violence against women in rural Bangladesh." *Social Science and Medicine*. Vol. 43. No. 12. pp. 1729-1742.
- 三角形, <http://www.freemap.jp/> (2008年9月30日).
- Batliwala, Srilatha. 1995. "Defining Women's Empowerment: A Conceptual Framework." Gender at work.  
[http://www.genderatwork.org/updir/Batliwala\\_empowerment\\_framework.htm](http://www.genderatwork.org/updir/Batliwala_empowerment_framework.htm).  
(January 13, 2006).
- Grameen Bank. 2006. "Annual Report 2005." Grameen Bank.  
<http://www.grameen-info.org/annualreport/annualreport2005/GB-2005.pdf>  
(June 19, 2007).
- Grameen Bank. 2009a. "Grameen Bank At a Grance." Grameen Bank.  
[http://www.grameen-info.org/index.php?option=com\\_content&task=view&id=26&Itemid=175](http://www.grameen-info.org/index.php?option=com_content&task=view&id=26&Itemid=175). (December 15, 2009).
- Grameen Bank. 2009b. "Monthly Report in USD." Grameen Bank.  
[http://www.grameen-info.org/index.php?option=com\\_content&task=view&id=453&Itemid=527](http://www.grameen-info.org/index.php?option=com_content&task=view&id=453&Itemid=527). (December 15, 2009).